

氏名（国籍）	陳 昱 龍（中華人民共和国）
学位の種類	博 士（スポーツ科学）
学位記番号	甲 第 27 号
学位授与日	平成29（2017）年3月17日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第4条第1項該当
研究科名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論文題目	大学生のライフスキルと運動習慣に関する中日比較研究
審査委員	主 査 教 授 土 屋 裕 睦 副 査 教 授 荒 木 雅 信 教 授 滝 瀬 定 文

論文内容の要旨

近年、日本では大学生の問題行動や不適応行動が増え続けており（中央教育審議会, 1996）、その対処には人間形成を促すライフスキル（以下LSとする）の獲得が有用であると言われている。こうした状況は、隣国である中国においても同様に見られている。しかし、日本とは対照的に、中国のLSに関する研究がまだなく、その運動習慣に焦点を当て、LSの獲得を促進する具体的な運動経験について検討を行った。またLS心理要因として運動参加動機に着目し、中日比較により検討した。

第2章では、日本で開発された「日常生活スキル尺度(大学生版)」(島本・石井, 2006)を中国語版に翻訳した。欧米と日本ではすでに児童生徒から成人まで発達段階ごとに尺度が開発されているが、中国ではLSに関する尺度は初めて使用されるという現状であった。中国人大学生（男子N=237, 女子N=361）を対象にした確認的因子分析での結果、「計画性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「親和性」「リーダーシップ」「感受性」「対人マナー」という8つの因子が確認され、日本語版の「日常生活スキル尺度(大学生版)」と同様の因子構造であることが認められた。このことから、中国語版の尺度の妥当性と信頼性が確認された。最終的に、24項目8因子で構成された中国語版の「日常生活スキル尺度(大学生版)」が作成された。また、作成された尺度を用いて中日比較した結果、「親和性」、「リーダーシップ」、「計画

性」,「情報要約力」と「自尊心」の得点は中国の大学生の方が高く,「感受性」と「対人マナー」の得点は日本の大学生の方が高いことが示された。

第3章では,スポーツにおける運動経験(運動回数)とLSとの関連性について詳細に検討するため,「日常生活スキル尺度(大学生版)」を用いて,小,中,高,大学までの各年代における運動経験との関連性を調べた。併せて,運動経験とLSの中日間比較を行った。その結果,日本(男子N=156,女子N=171)では,高校時に運動経験が「親和性」,「対人マナー」,下位領域である「対人スキル」およびLS合計得点との間にそれぞれ正の相関を示したが,中国(男子N=181,女子N=150)では,日本のような関連性は見られなかった。部活動への参加は他者との交流が増えるため,こうしたスキルの獲得がより必要となったことを反映していると考えられる。また,LSの下位領域である「対人スキル」は総じて中国より日本のほうが高く,「個人的スキル」は総じて日本より中国のほうが高かった。

LSの獲得には心理的要因の影響は切り離せない。LSを高める1つの要因として,「運動活動への参加動機」が考えられる。そこで第4章では,運動への参加動機を説明変数,LSを目的変数として重回帰分析を実施した。重回帰分析の結果をまとめると,「熟達」の影響は中国(男子N=237,女子N=289)のみにみられ,「身体状態」の影響は日本(男子N=228,女子N=285)のみに見られた。

以上のことから,スポーツを通してLSを高めるためには,スポーツへの参加動機やスポーツに対する考え方に十分留意する必要があることが示唆された。加えて,日本と中国のスポーツの実施形態の異なることの影響も推察された。

審査結果の要旨

(論文審査)

近年,大学生の問題行動や不適応行動が増えており,その対処には人間形成を促すライフスキル(LS)の獲得が有用であると言われている。日本における研究では,LSがスポーツ活動において身に付くことが知られている。こうした大学生の課題は,隣国である中国においても同様に見られるが,日本とは対照的に,中国のLSに関する研究はこれまでほとんど行われていない。そこで本研究では,大学生のライフスキルと運動習慣に関する中日比較研究を行った。はじめに研究Ⅰでは,日本で開発された「日常生活スキル尺度(大学生版)」(島本・石井,2006)を中国語版に翻訳し,中国人大学生(男子237名,女子361名)を対象に調査を実施した。その結果,①中国人大学生を対象にした場合にも日本語版と同じ因子構造が確認され,②十分な信頼性・妥当性が確認された。そこで研究Ⅱでは,過去の運動経験とLSとの関連性を調べるため,中国人大学生(男子N=181,女子N=150)と日本人大学生(男子N=156,女子N=171)のLS比較を行った。その結果,①LSの「対人スキル」は総じて日本のほうが高く,「個人的スキル」は,中国のほうが高いこと,②日本では,運動実施頻度とLSとの間に関連性の認められるものの,中国では明確な関連性の認められないことが分かった。このことは,運動の実施形態,すなわち日本の運動部活動が深く関係していると想定されたので,さらに研究Ⅲでは,運動参加動機とLSとの関連性を調べた。中国人大学生(男子N=237,女子N=289)と日本人大学生(男子N=228,女子N=285)を対象に比較調査を実施し

た結果、両国ともに運動参加動機は LS と関係しており、運動と LS の間に正の関連性が認められた。さらに日本の大学生のほうが、運動参加動機が高く、その参加動機は「対人スキル」に強く影響を与えていることが確かめられた。

論文審査の結果、中国大学生の LS の状況の一端について明らかにし、中日比較研究により、運動習慣との関係の違いを見出したこと、さらに運動参加動機にも違いの認められることから、LS 獲得のための運動のあり方について興味深い知見を得たことが評価された。

(最終試験)

提出論文をもとに、関連する事柄及び発表会での質疑に対する応答の内容を中心に、口頭試問を行った。具体的には、①サンプリング（標本抽出方法）、②統計検定、③性差の検討、について質問したところ、的確な回答があった。さらに疫学研究で用いられる無作為抽出法にも言及して、両国の教育システムの違い等を反映させた考察を加えることで、より主張が明確になることを確認し、加筆することとした。また関連する事項についても十分な回答がなされた。以上から、大学院で学んだ知識が博士の学位授与の基準を満たしていると判断されたので、合格と判定した。